池波正太郎
新年の二つの別れ

朝日新聞社

新年の二つの別れ
発　行――一九七七年六月二〇日　第一刷
定　価――一、〇〇〇円
著　者――池波正太郎
発行者――角田秀雄
印刷所――明善印刷
発行所――朝日新聞社　東京　大阪　名古屋　北九州
© S. IKENAMI 1977 0095-254497-0042

新年の二つの別れ●目次

1

長谷川伸 10
新年の二つの別れ 21
父 27
文士と悪童 34
友よいずこに? 38
情緒と人間 43
田島直人の泪 47
タバコを売る少女 52
肉体の機能 54
自信と慢心 55
鯨の曲芸 56
夏 57

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

私の桜花 58
町で見る俳優たち 63
歌舞伎座の一夜 68
職人の感覚 72
対談●江國滋vs池波正太郎
現代立腹帖 77

2

飛騨・高山 96
金沢 107
駿河路 118
近江の秋 132
旅と私 136
旅日記 140

浅草 152
上野 155
湯島天神境内 159
新宿 163

3

東大寺の結解料理 174
小鍋だて 185
ソースをたっぷり 189
鯛 192
冷奴 192
かき氷 193
花見とだんご 194
ポテト・フライ 195

オムライス 197
酒に交われば 199
のめる人のめぬ人 205
気分転換 209
映画楽しみ40年 215
賀状 219
猫とわたし 222
鬼の居ぬ間 225
対談●吉村昭vs池波正太郎
東京の町と人情 230

4

福島正則と酒 250
敵討ち 255

堀部安兵衛　269
伊庭八郎　287
大石内蔵助　303
西郷隆盛　306
時代小説うらばなし　309
時代小説について　316
私のヒーロー　321
対談●江國滋vs池波正太郎
長谷川平蔵の秘密　329

装幀　多田進

新年の二つの別れ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

長谷川伸

一

はじめて、長谷川伸先生をたずねたのは、昭和二十三年の夏のさかりだったと思う。

前年、私が、ある新聞社の戯曲懸賞に応募して入選した、そのときの選者のひとりが、先生であった。

それだけのことをたよりにして劇作の指導をうけたいと思い、紹介者もなく、手紙をさしあげたら、

……小生方のおたずねはいつでもよろしい。土曜でも日曜でも、そちらの仕事をさまたげぬことでありたい——という御手紙をいただいた。

当時、私は都庁につとめていたからである。

その日は、じりじり照りつける暑い日で、私は二本榎のお宅の前までくると気おくれがして門

の中へ入れず、何度も行ったり来たりして、しまいには小水がもりそうになってしまい、前の明治学院の便所へかけこみ、用を足し、水で顔を洗ってから、思いきって、門へはいって行った。

奥さまが親切に応対して下さった。

先生は、どこかの会合から帰られたところだったが、コチコチになっている私を見ると、

「君。らくにし給え」

こう言われて、いきなり下帯ひとつになられた。それで、私もいくらか気がらくになり、いろいろと話しはじめたのである。

そのとき、先生の「ふともも」のたくましさを眼前に見て、私はおどろいた。とうてい六十を越えた人の筋肉ではなかった。

このとき、先生が言われた。

「作家になるという、この仕事はねえ、苦労の激しさが肉体をそこなうし、おまけに精神がか細くなってしまうおそれが大きいんだが……男のやる仕事としては、かなりやり甲斐のある仕事だよ。もし、この道へはいって、このことをうたがうものは、成功を条件としているからなんで、好きな仕事をして成功しないものならば男一代の仕事ではないということだったら、世の中にどんな男の仕事があるだろうか、こういうことなんだね。ま、いっしょに勉強しようよ」

先生の指導をうけるようになってから、私は、かなりあつかましかった。どんな社会にも、そ

れぞれの順序、しきたりみたいなものがあるのだろうが、新米の私は、書庫の本をかってに見せてもらったり、今から考えると冷汗の出るような質問をくどくどやったり、ただもう、がむしゃらになってぶつかっていったつもりだ。

こんな私を根気よく育てて下すった先生の「寛容」というものを、このごろ、つくづくと考えてみる。先生は、あらゆるものに「寛容」だ。

このことについては書きたいことが山ほどあるのだが……。うまく書けないのが残念だ。

先生に接した人びとは、みなそれぞれに違う先生のイメージをもつことと思う。私が今つよく感ずるのは先生のドライさである。この場合のドライということは、一人の人間が、自分自身を見つめる眼のドライさ、ということだ。

絶えず自分を冷たく突き放して見つめることを忘れるな、とでも言ったらよいのか……ことばにはきこえなくとも、私には先生の生活態度が何かそのようなものを語っているように思えてならない。

二

松竹少女歌劇の「夏の踊り」だったろうか——数年前のことだ。

小月冴子が、ライオンに扮して「アフリカ」のナンバーを踊ったことがある。

トロピカルな音楽のリズムにのって、ライオンのボスが土人の狩人から仲間や恋人を守り、ついに自分が狩人の投げ槍に倒れるまでを、小月冴子は激しい情熱をもって踊りぬいた。音楽も振り付けもよかった。

あまりにすばらしかったので、長谷川先生に話した。

「ふむ、ふむ……」

先生は目を光らせて聞いておられたが、一か月ほどしてお目にかかったとき、

「この間、ライオン、見てきたよ」と言われた。

ぼくは、そのドンヨクさにちょっと、おどろいた。

「君の言う通り、あの小月冴子っていう人のライオンは、すばらしかった」

二年ほどして、何かのときに、また、

「あのときの小月冴子のライオンはよかったねえ」と言われた。

あるときに、先生が言われた。

「自殺というものは、全くひとりよがりのやり方だ。死ぬのなら役立って死ぬんだ。何もしないで死ねばすむというのは卑怯だよ」

また、あるときに、

「人間の肉体というものは、自然の影響を非常に敏感に感じるため、かえって種々の錯覚に落ちいるのだ、無用のね」

また、あるときに、

「役者というものは、自分の顔の欠点というものを気にしているときが一番、芸のいけないときだ。しかし欠点がないとうぬぼれたときも、また一番いけないときなんだね」

また、あるとき、

「何が新しいか何が古いかということは単純きわまる論拠なんだねえ。新しいものは古いものからしか生まれてこないのだ。古いものから出た新しいものというのはある。しかし新しいものという究極のものはないんだ。また古いものの究極もないのだよ」

十数年前に先生は大病をされた。

生死の間を何度も行ったり来たりした。しかし、便所だけは一人で起き上がられて行かれた。だれがとめても断固として、これをつづけた。奇蹟的に回復されたあとで、こう言われた。

「別に強情張ってたわけじゃないよ。それやァぼくだって楽に用を足した方がいいにきまっている。しかし、あのとき楽になってしまっては、もう、それっきりだめだったのだよ。ぼくは自分の病気を癒すために苦しくっても一人で便所へ行ったのだ。ぼくなんか君、若いときからだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com